

# 生活様式における食事内容・食器・食器棚の関係

—コーレ・クリントと婦人之友社の方法をもとに—

小川 正光, 平地 彩香\*, 加藤由実子\*

## 1. 本研究の目的と背景

現代の日本人の食事は多様化しており、和食だけでなく洋食、中華料理など様々な料理を食べている。また、食事の方法も、外食や中食など多様化している。使用する食器に関しても、和食器も洋食器も使用することが当然となり、箸だけでなくナイフ・フォークも使用するようになり、多様化している。これまでは、一汁三菜を基本とする家庭で作った料理が食卓に並び、使い慣れた和食器を使い、家族全員揃って食べ、終わると食器棚に収納するという、わが国の食生活の定型化した様式が大切にされてきた。しかし、現代では食生活の多様化に伴い、使用頻度の低い食器を死蔵するなど、空間を有効に活用していない一方で、死蔵された食器等を思い切って捨てる断捨離という動きが世間に見られ、住生活の上でも多様な状況がみられる。このような状況を把握するためには、食生活を構成する食事内容から、住生活を構成する家具についてまで、食器の数・種類・寸法、食器棚などの、相互の一連の関連を「様式」として把握して、考察する必要がある。

本研究では、まず、実際に必要な食器を設定し、それらを収納する食器棚を設計したデンマークの家具研究者であるコーレ・クリント<sup>註1)</sup>(1888 - 1954)の提案と、無駄のない食生活・食器量の関係を、整理という視点から提案した、わが国における婦人之友社<sup>註2)</sup>にみられる考え方について分析した。その後、わが国の家庭における食器の所有・使用状況の実態と評価を調査した。そして、理論的提案と実態とを総合的に考察した。

本研究は、食事内容・食器の数・種類寸法という食生活に関する面と、食器・食器棚という住生活に関する面の両側面から考察し、現在の生活に合致した望ましい「様式」のあり方を検討する点に独自性がある。

## 2. 調査・分析方法

### (1) コーレ・クリントの文献調査

デンマーク王立アカデミーの家具科を創設したコーレ・クリントの文献<sup>文1)</sup>を和訳し、また、図を解析することで、クリントの食器棚を作る際に想定した食器の種類と量、寸法の取り方、収納方法の計画内容を分析した。

### (2) 婦人之友社の文献調査

どのような食器を揃えるべきか、食器の整理整頓の方法などについて検討し、提案している計画内容を分析した。<sup>文2)</sup>

---

\*家政教育講座・学生

### (3) 2つの理論の共通点の分析

コーレ・クリントの理論と婦人之友社の理論の共通点を分析した。

### (4) 日本とデンマークの食生活についての調査

食事内容、食べているもの、使用する食器、食事に対する考え方等について調査し、日本とデンマークとの違いを分析した。

### (5) 典型的家庭における実態調査

H家とK家の2つの家庭の家族構成と食事内容、食器棚の寸法と収納する食器、食器棚に関する使用者の悩み等の詳細な調査を、使用者へのインタビューを取り入れて実施した。そして、食器と食器棚における収納状況について(3)と比較して分析した。

## 3. コーレ・クリントと婦人之友社の理論と成果

### (1) コーレ・クリントの提案と考察

クリントは、白銀比と呼ばれる比率を効率良く使い、デンマークがメートル法へと切り替わった後も身体尺度であるインチを用い続けた、古典様式についての研究者であり、設計者であった。さらに、使用する主婦の意見を取り入れ、機械での量産ではなく手作りこだわった。その結果、彼の設計する家具は優れた収納力だけでなく、人の動作をも考慮した設計になっており(図1)、既存の家具概念を覆すものであった。

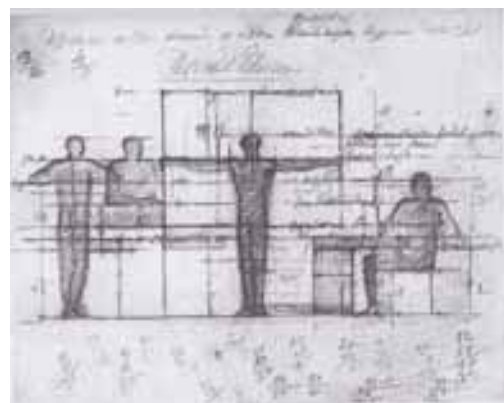


図1 クリントのスケッチ

1888年にデンマークの首都コペンハーゲンに誕生してから1954年に他界するまでの彼の人生について、著書は希少であり、作品数も他のデザイナーに比べて少ないため、わが国において彼の名が世間に広く知れ渡っているとはいえない。家具の研究者・設計士として働く一方で、デンマーク王立芸術アカデミーの建築学部家具科で教授を務めた。日本においても著名なデザイナーのヤコブセン (Arne Jacobsen) も、クリントの教えを受けていたことが明らかになっている。

クリントに関する文献<sup>2)</sup>から<sup>註3)</sup>、彼がコペンハーゲンの一般的なアパートに対応した合理的な家具を設計する際に、デンマーク主婦の友の会の会長のカーラ・マイヤーからの助言を受けていたことが分かった。建築家の発想だけではなく、中心になって使用する主体が関与することで設計されていたことが、大きな成果に結びついていた。クリントが行った、使う人との対話の中から学び、考えていく設計方法を確立したことは、彼の大きな成果であった。

クリントが設計した食器棚の図面を解析した結果、何をどこに納めるかの収納方法、12人分の食器類一式を縦3列に分け、2種類のサイズのトレイに収納する合理性を見出していたことが明らかになった(図2)。食器棚内部を固定せずに引き出し式のトレイにすることで、奥の食器も取り

出しやすくする工夫を行っていた。そのトレイは、引き出して、さらに取り出すこともでき、テーブルの用意をする際にも、食器棚に片付ける際にも食器を運ぶことが可能であった(図3)。

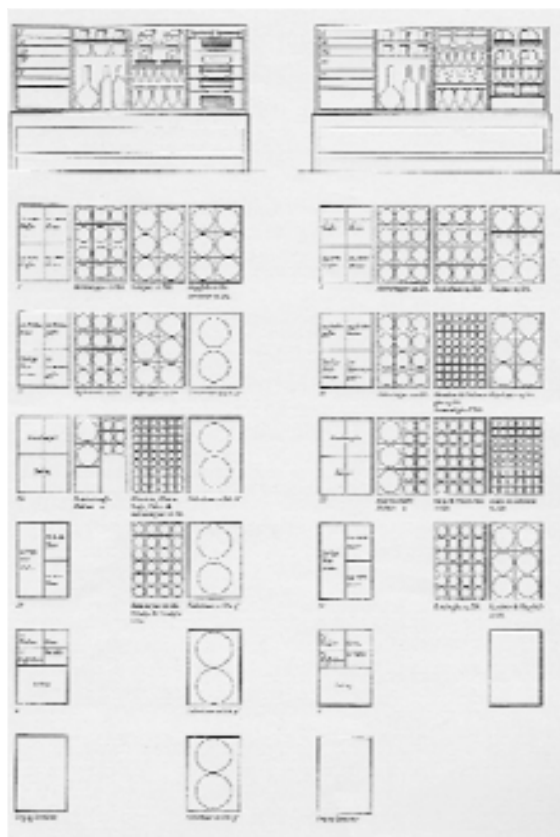


図2 12人分の食器類一式を収納する棚Aタイプ

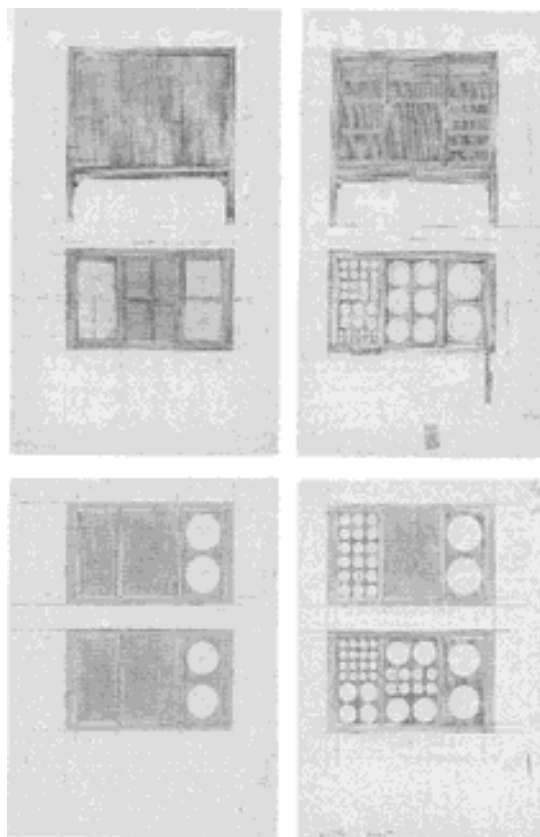


図3 12人分の食器類一式を収納する棚Bタイプ

## (2) 婦人之友社の提案と成果

この文献では、主婦が提案を行っており、生活に基盤を置いて考察した成果であった。

来客の多い家の場合には6人分、来客の少ない家の場合には3人分の食器を常時用意しておく方が良いと述べている。普段用と客用を区別しない方が手軽であるが、御飯茶碗、汁椀、湯のみ、お箸など、毎日何度か使うものだけは好きなものを揃えても良い、と提案している。

料理の多様性に対する食器の種類と量の原則としては、「数はできるだけ少なく、われたときに補充のきくものを」という方針を勧めており、基本となる一揃いを、和食でも洋食でも中華でも合うように、模様の少ない無地に近いお皿にしておく方が良いと説明している(図4)。



図4 提案された「新ホームセット」

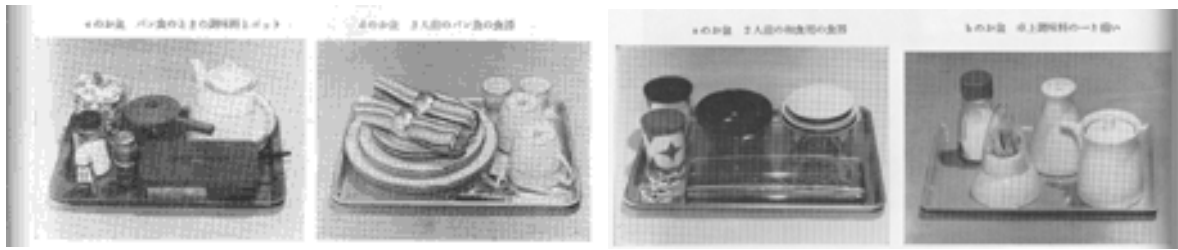


図5 トレイを使用した収納法

また、使用する場面に合わせた一揃いの食器類を、トレイを使用して収納する方法も提案している(図5)。

### (3) コーレ・クリントと婦人之友社における提案の共通点

#### ①食器棚の中をトレイで分ける

クリントは、トレイを用いることで、奥に収納されたものを容易に取り出すことができるようにしている。婦人之友社は、毎日使うものを、使う場面ごとにトレイに分けて載せている。どちらも、食器棚の利便性を高めるためにトレイを用いているといえる。

#### ②実際に使用する主婦の意見を取り入れている

クリントは、デンマーク主婦の友の会のカーラ・マイヤーの助言を受けて食器棚を設計し、婦人之友社は、食器棚の使用方法を主婦の会での意見を取り入れ、提案している。

#### ③ティーカップをコンパクトに収納している

クリントは、ティーカップ4つを水平に横たえ、持ち手をカップの中に入れて1セットにしてコンパクトに収納している。婦人之友社は、棚に小さな釘を打って掛けるか、ティーカップ立てを利用して仕舞うという方法を提示している。2つの理論は、どちらもそれぞれ工夫して、かさばりやすいティーカップをコンパクトに収納する方法を示している(図6, 7)。



図6 クリントが提案するティーカップの収納法

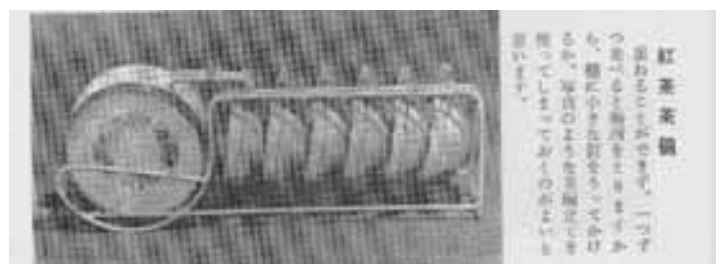


図7 婦人之友社が提案するティーカップの収納法

## 4. 日本とデンマークにおける食生活の比較

### (1) デンマークの食事内容

デンマークの主食は、じゃがいもである。酪農が盛んで、チーズやパン、肉や魚料理が食卓に並ぶ。代表的な食のスタイルは、オープンサンド(スモーブロー)である(図8, 9)。パンの上にさまざまな具をのせてナイフとフォークで食べる。一般的な食卓では、大きめの平皿やボウルにおかずが盛っており、食べる分だけ自分の平皿に取り分ける。朝は、コーヒーや紅茶と、ジャムやバターをぬったパンを食べ、夜は、じゃがいもを主食とした肉や魚の温かいものを食べる。

### (2) デンマークの食器量

デンマークでは、(1)で述べたように主に平皿を使うため、食器の種類は少ない。しかし、同じ種類の平皿に料理を盛り付け、よく客人を招くことから、おかずを盛る皿や取り皿の数自体が多い。また、デンマークは、「ロイヤル・コペンハーゲン」や「LEGO」に代表されるように、シンプルなデザインが溢れた国であり、食器もまたシンプルなものが多い。

### (3) デンマークの暮らしの中の意識

デンマークは歴史的な町並みを残した国であるが、そのなかでも、最古の町リーベには古い家が多く立ち並んでいる。また、古いものをリメイクし、新たな素材として利用するなど、新しいものと古いものを大切にしながら暮らしている。そして、家の門が開いていれば誰にでも家を見せてくれるという習慣があるなど、デンマークでは気軽にホームパーティーを開き、客人を迎える意識が根付いている。

### (4) わが国の食事内容

わが国では、一汁三菜を基本とした和食を伝統としており、各個人に、おかずが入った和食器が並ぶ(図10)。しかし、現在は食文化が多様化し、家庭でも和食、洋食、中華など様々な料理が食べられるようになった。

### (5) わが国の食器量

わが国は、盛り付けに対して強い美意識を持ち、一汁三菜を基本とした食事には、それぞれの料理に合った、異なる食器を使う。その結果、様々な料理の盛り付けに合うよう、食器の種類が豊富である。また、わが国では食文化の多様化により、更に食器の種類が増えている。

### (6) デンマークと日本の食生活の違い

デンマークでは、同じ種類の食器の数が多く、わが国は、食文化の多様化から食器の種類数が多い。デンマークにおいても食文化に変化が起きていないわけではないが、わが国ほど他国籍の料理を食べる機会はなく、また、わが国ほど盛り付けに使う食器に模様や形のこだわりを持っておらず、シンプルなデザインの食器を好む。客用と普段使いのものを区別しないため、食器の種類数は少なく、各食器の枚数が多いといえる。



図8 オープンサンド  
(スモーブロー)



図9 デンマークの代表的な昼食



図10 日本の代表的な食事

## 5. 2つの家庭の実態調査の結果と分析

### (1) H家の食生活と食器棚の実態

H家では、父（50代後半）、母（50代前半）、長女（20代前半）、次女（20代前半）、長男（小学校高学年）の5人が、戸建てに住んでいるが、朝昼夜とも、家族全員がそろって食事することはない。現在の住宅に引っ越してから、来客は年に1, 2回ほどになった。

食器棚については、食器の数が多くて使いづらくなっていると感じており、食器棚自体の空間利用についても悩みを持っていた。食器棚の前には荷物が置かれ、食器棚の下の段が使用しにくくなっていた。

また、食器棚の内部の調査の結果から、総食器数の約72%が、全く使っていない食器で（図11）、総食器数の約55%がもらいものであった（図12）。

また、全く使っていない食器の約65%がもらいものであった（図13）。よく使う食器は、買ったものや洋風のもが多く（図14, 15）、会社関係者や親類からのもらいものは捨てづらいと感じていた。

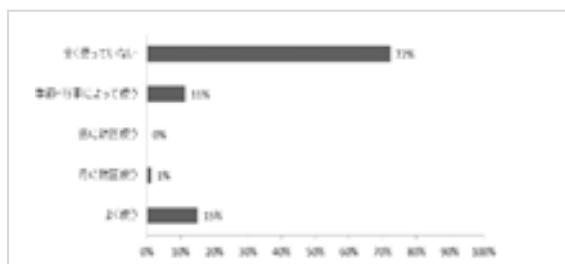


図11 食器の使用頻度別の割合

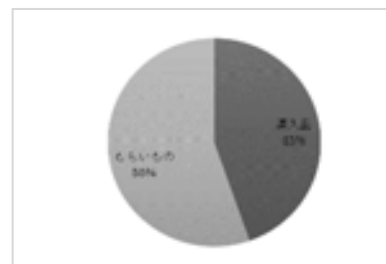


図12 もらいものと購入品の割合

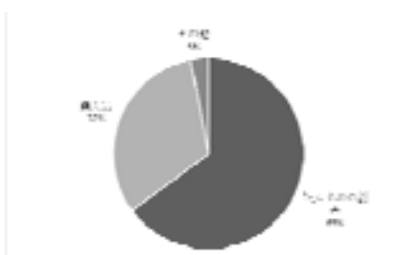


図13 全く使っていない食器の割合

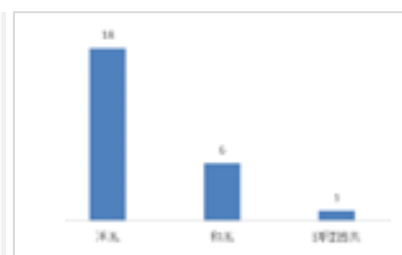


図14 よく使う食器の種類

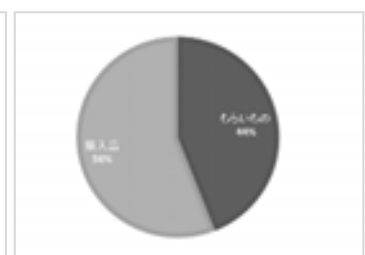


図15 よく使う食器

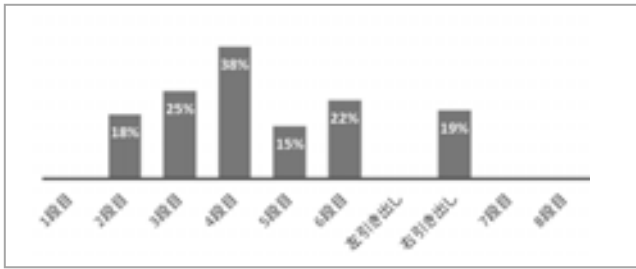


図16 段別、よく使う食器の割合

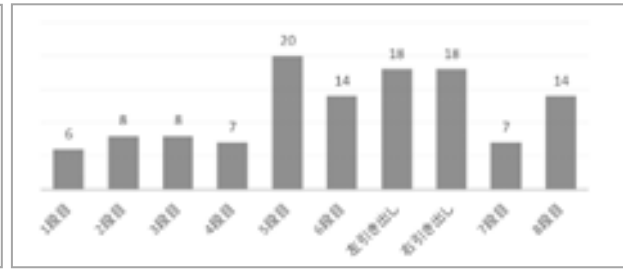


図17 段別、全く使っていない食器数

よく使う食器は、手の届きやすい棚に順に多く収納され、使いづらい段には収納されていなかった（図16）。しかし、全く使っていない食器はどの段にも存在していた（図17）。

## (2) K家における食生活と食器棚の実態

K家は、父（60代前半）、母（50代後半）、長女（20代前半）、次女（20代前半）の4人家族で、長女は2012年5月から、仕事のため実家を離れて一人暮らしを始め、現在は、父と母と次女の3人で住んでいる。毎日の朝食と夕食は、基本的に3人が揃って家で共に食べ、ホームパーティーを開くことはなく、友人を招いて家で食事をするものもない。しかし、住宅の1階で事務所を構えているため、事務所の客人にお茶を出す機会が多い。

食器に関しては、食器を積み重ねて収納することに悩みを持っており、無駄な食器が多いと感じていた。食器棚の前に家具があり、食器を取り出す際の障害物となっていた。

食器棚内部の調査の結果から、日常的に使用する食器は全体の2割程度で（図18）、よく使うものは、洋風のものを買ったものであった（図19、20）。

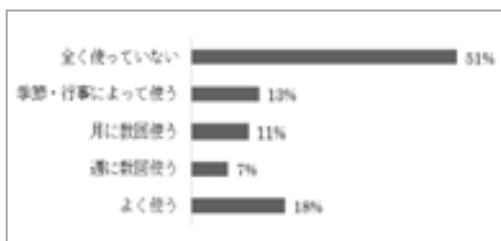


図18 食器の使用頻度別の割合

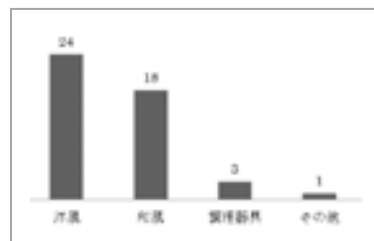


図19 よく使う食器の種類

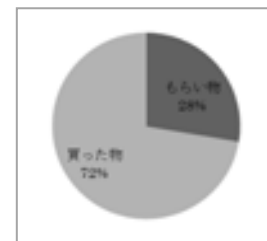


図20 よく使うもの内訳

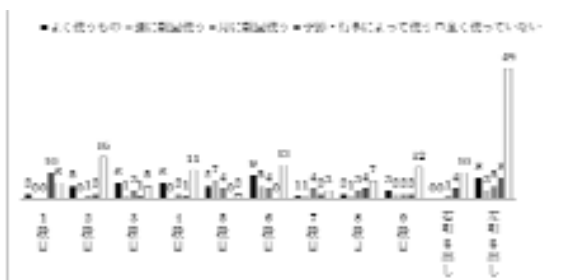


図21 段別使用頻度別食器数

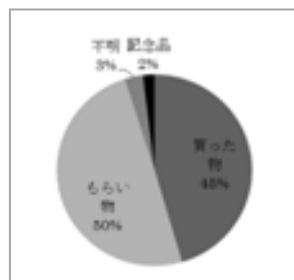


図22 もらいものと購入品の割合

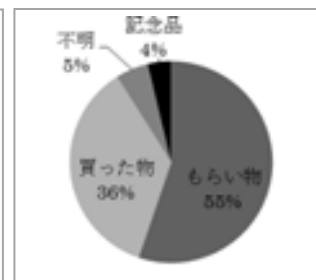


図23 全く使っていない割合

また、全く使っていない食器は、どの段にも存在し（図 2 1）、食器の種類のは半分はもらいものであった（図 2 2）。全く使っていないもののうち、約 55%がもらいもので（図 2 3）、もらいものは捨てるににくいと感じていた。

さらに、主使用者が腕を痛めているため、食器棚使用の際には負担を軽くしたいと考えていた。

## 6. 典型的家庭における改善結果

### (1) H 家における改善

H 家では、食器の多さが気になるため、調査者が、調査結果を基に、使っていない食器を処分し、食器棚の整理を行うことを提案したところ、主使用者が、自ら処分と整理を行った。存在を忘れていた食器は、もらいもので、処分しにくいものが多いので、再び使用するように、手の届く位置に配置した。主使用者は、使いやすくなったと話し、整理の方法として有効であった。また、主使用者は、今後も改善を続けていくと話し、改善しても完全なものとなっているわけではなかった。

### (2) K 家における改善

K 家では、①調査・分析結果を主使用者へ提示、②いらぬ食器を食器棚から取り出して処分するか、もう一度検討して、処分、③残った食器を、より取り出しやすい位置に移動させる、という①～③を順に行うことで改善を行い、使用者の感性を取り入れて、都合の良い食器棚を目指した。その結果、朝食の際に、食器類が取り出しやすくなり、改善前の悩みが解消された。

## 7. 理論的提案と典型的家庭における実態との比較・検討

クリントや主婦之友社の理論は、2 つの家庭の生活様式の中には反映されていなかった。わが国では、食器や食器棚を購入する際にも、収納などの理論的根拠を考えていない。トレイを利用する方法も、H 家では有効な方法と考えられるが、主使用者が腕を痛めている K 家では、トレイに食器をまとめているので重さが問題となり、有効な方法とは考えにくい。マグカップの収納法に関しても、カップの種類と個数が合わず、活用しにくい方法であった。しかし、2 つの文献のように主使用者の意見を聞き、そこから改善策を考えることは重要である。

そして、H 家と K 家の実態調査を行った結果、両家庭ともに、よく使う食器は全体の約 2 割程で、残りの全く使っていない食器の約 6 割は、もらいものであった。また、全く使っていない食器は、H 家では約 7 割を占め、K 家では 5 割以上を占めていた。これは、K 家が自営業で客人を招く機会があり、H 家よりも使う食器が多いためと考えられる。よく使う食器は、両家庭とも購入したものの方が割合が高く、全く使わない食器ではもらいものの方が割合が高かった。両家庭とも、もらいものが全体の 5 割以上を占めており、もらったものは捨てるににくいと考えているため、全く使っていないもらいものが最大の要因と考えられる。改善策として、使わないと判断したものを処分することや、使っていなかったものを新たに使用するよう配置を変えることで、



主使用者の感じていた悩みを軽減させることが可能となった。

## 8. まとめ

典型的な家庭では、食事内容と食器の多様化があり、収納も混乱していた。もらい物の習慣も混乱させる要因である。コーレ・クリントと婦人之友社による理論は有効であり、今後、生活に活かす必要がある。

## 註

- 1) 北欧モダン家具の基礎を築いたとされるデンマークの家具の研究者であり設計者である。
- 2) 時代をリードし、読者である主婦達と力を合わせて社会や家庭を創造しようという理想を持った雑誌出版会社である。この会社は生活改善を試みた主婦が主体となって活動している。本研究の主要参考文献である「持ちものつくらし方(上) 住と食」は、全4巻の若い家庭の家事シリーズの第3巻であるが、このシリーズでは住の他にも食、衣、家計など広く主婦の暮らしの家庭づくりに役立つ知識を記載した著書である。現在では、婦人之友社は家計簿に関する著書を中心に取り扱い、各家庭のそれぞれの暮らしを大切にしつつ、良い生活方法が発見されたら著書にまとめて出版するという、読者と共に作る形態を採っている。また、「友の会」という主婦のための衣食住などの生活講習会を定期的に開催している。
- 3) 文献1)について行ったコーレ・クリントに関する和訳は、以下の2編である。

### ①第11章 コペンハーゲン家具職人組合の家具展覧会

オット・マイヤー(Otto Meyer)

デンマーク技術研究所展示室

1928年10月27日～11月11日

コーレ・クリント(Kaare Klint)は、1928年にコペンハーゲンの職人組合家具展覧会でデビューした。デンマークの技術研究所の展示会場で開催されたもので、組合として2回目の展覧会であった。この展覧会は、ラド・ラスムッセン家具製作所(Rud.Rasmussens Snedkerier)がクリントの家具を作らなかった唯一のものである。

オット・マイヤーは、デンマーク工芸デザイン美術館のショーケースを作った親方職人の1人で、この展覧会では食器棚を作製・出品した。

1928年11月8日のナショナルタイムズ紙(Nationaltidende)は、食器棚について高い評価を掲載し、女性の読者に、クリントと、使用上のアドバイスをしたカーラ・マイヤーが合作したすばらしい成果として推薦した。カーラ・マイヤーは、家具職人の妻であり、また、デンマーク主婦の会会長でもあった。展示会の食器棚は最新のものではなかった。オット・マイヤーは1927年に亡くなっているが、食器棚は1926年に作られたものである。

カーラ・マイヤー(Carla Meyer)は、建築家協会が1926年に開催したデンマーク住宅建築展示会にも尽力した。その基となる分析作業は、住居の実用的な機能を分析するものだった。

コペンハーゲンの家族用アパートの大半は、2室と台所という構成であった。この展示会は、住居条件の改善をしようとしたもので、可能ならば、これらのアパートの家具の備え付けを変えたり、より合理的な形の家具を提供したりして、改善しようとした。

協会は、ルイ・ハイゴン(Louis Hygom)とイブ・ブランディング(Ib Lunding)により設計例として展示された 2K アパートで使用する備品や展示会に使える提案を募集した。加えて、協会は、コーレ・クリントにいくつかの家具タイプとそれらの配置図の提案を依頼したが、この食器棚しか展示されなかった。

クリントの設計図は、食器棚と類似した構造や作風の一連の家具のスケッチを含んでいた。一連の家具は、たんす、洋服ダンス、ベッド、ベビーベッドであり、それらはハイゴンとランディングが設計したアパートにおいて配置する計画も描いていた。おそらくクリントは、2K のアパートのための家具について、より大規模な計画を始めていたのだが、何らかの理由で、食器棚しか作られなかったのである。1927 年に、ライプツィヒ (Leipzig) のグラッシ応用美術館でのヨーロッパ美術工芸品展示会において、デンマークのコーナーで展示された。

成果の一部は、1924 年にアカデミーでクリントが始めたインテリアと家具のデザインコースにおけるプログラム成果である。彼は、収納家具をデザインする際の複雑な問題を説明しているが、その中で、収納する中身や、数量、使い方、積み重ね方の調査・分析が、家具の大きさや形を決める方法の 1 つであると述べている。

その調査・分析は、学生によって行われ、食器棚をデザインする上での基礎資料として役立った。フレミング・テイセン(Flemming Teisen)は、この計画に学生として参加し、また後に、クリントの研究者としても活動した。クリントは自身の教育を説明するために、夕食用食器一式や平皿類、テーブルのリネン類、寝具そして紳士服などについてテイセンが行った研究を発表している。

様々な製造業者による夕食用食器一式やナイフ・フォーク類などの寸法に関する調査が比較の基礎資料となり、その結果、様々な家具における平面図での基準となる寸法と必要な高さの関係を定めることができた。続いて、12 人分の食卓用食器類の収納方法を検討した結果、2 つのトレイの寸法が導き出された。

今までは、戸棚の中に固定された棚の上に決まった物が置かれていた。後ろの物を使いたい時には、前にある物を越えて手を入れなければならないため、前の物の上に、手を入れるだけの隙間が必要だった。

固定した棚より、トレイを使用するクリントの方式の方が、合理的に収納家具の内部を利用できる。

食器棚の両端にはレールが付けられ、トレイは、その容量が最大となるよう、出来るだけ近づけて配置されている。そのトレイは、テーブルの用意をする時には食器を運ぶために使われ、食事が終われば台所から食器棚に戻すためにも使われた。

その食器棚の内部は 3 つに分けられている。真ん中のトレイは 2 : 3 の比率で、両側の部分は 1 : 2 の比率のトレイになる。食器棚の外観は、正面は正方形で、両側面と平面は 1 : 2 の比率となり、単純な釣り合いになっている。その構造は、パネル状の扉が付いた枠組みになっている。4 つの脚には真鍮の石突きがはめ込まれた。2 枚の扉は、中のトレイの分割を反映して、さらに 2 つに分け、ピアノヒンジで留められている。木材は塗装せず、油で磨いたキューバン・マホガニーである。

アルネ・ヤコブセン(Arne Jacobsen)も、クリントの学生だった時に、収納家具の問題の研究をしなければならなかった。両者の考え方は同じだったが、表現はわずかに異なっている。ヤコブセンは、1927 年 1 月にアカデミーを卒業した。しかし、彼が 1929 年に自身の家を建て、引っ越すことができた時、彼は先生(クリント)の食器棚を購入しているのだ！

ビング&グロンダール(Bing&Gronda HI)は多くの種類の食器セットを作ったが、装飾は変化するにもかかわらず、用途が同じ食器の場合は、形と大きさは同じにしている。この研究方法は、家具デザイン学部で完

成されたもので、食器類も、その当時の典型であった。

## ② 1 ダースの食器セット用の食器棚について

この解説書は1926年12月28日にアーキテクテン (ArcHitekten) に掲載されている。

- 1 段目 (左上の図) について: 両側にある2つの区画には、折りたたむと18インチ角または27インチ角、または9インチ角になる布を入れる3つの引き出しがある。さらに、リングをはめたナプキンと、パンくず用トレイとブラシを入れる空間もある。中央の4つの引き出しには、12人分のナイフ・フォーク類と特殊な食器・器具類を保管する。
- 2 段目 (右上の図) について: 出し入れできるトレイの上に、直径21/4インチのマデイラワイングラスを16個、直径3インチの水用グラスを6個、直径11/2インチのスナップス用グラスを12個、コーヒーカップとソーサーを12個、ティーカップとソーサーを12個 (4個のカップを水平に横たえ、持ち手をカップの中に入れて、4枚のソーサーの上に置く)、直径9インチの大きなスープ皿12枚が収納される。
- 3 段目 (中央左の図) について: 直径9インチの大皿12枚が収納される。
- 4 段目 (中央右の図) について: 直径3インチの赤ワイングラス12個と、直径3インチの水用グラス6個、直径9インチの大皿12枚が収納される。
- 5 段目 (左下の図) について: 直径8インチの皿12枚が収納される。
- 6 段目 (右下の図) について: 直径21/4インチの白ワイングラスを16個、直径41/4インチのフィンガーボウル12枚が収納される。
- 中央の区画について: 直径6インチのデザート用ワインのデカンター2つと、直径3インチの赤ワイン用デカンター8つと、直径6インチのアイスクリーム皿12枚と、直径6インチの脚付き盛り皿12枚と、直径8インチのスープ皿12枚が収納される。

## 参考文献

- 1) Gorm HarKær : Kaare Klint1, KLINTIANA, 2010
- 2) 婦人之友編集部: 持ちものとからし方 (上) 住と食, 婦人之友社 1963
- 3) 山本和史: コーレ・クリントの機能数列とモダン概念, 岡山大学大学院, 2010.4
- 4) yutorino (ユトリノ), 白夜書房, 2007.1
- 5) 松下希和: 住宅・インテリアの解剖図鑑, 株式会社エクスナレッジ, 2011.12
- 6) 増田奏: 住まいの解剖図鑑, 株式会社エクスナレッジ, 2009.11
- 7) 丸善株式会社: 建築設計資料集成3 単位空間 I, 1980
- 8) 稲垣早苗: 北欧の和み デンマークの扉をあけて, KTC 中央出版, 2008.9
- 9) 植月縁・鈴木緑: 北欧 ナチュラルライフに出会う旅, 東京書籍, 1999.4
- 10) 鈴木緑: 北欧 デザインと美食に出会う旅, 東京書籍, 2001.4